

01・怪しい薬を浴びたので、催淫状態などになる

『ミネルヴァさんの実験台』とは別の世界線。
クロエと主人公が交際・同棲している世界。

外は雨。18時ごろ。

主人公、外からあわてて帰つてくると、大急ぎで布団に入り、あたかもずっと寝ていた
かのようなふりをしてクロエの帰りを待つている。

外へ出ていた事を知られると、色々とまずいのである。
するとそこへ、クロエが帰宅してきた。
間一髪である。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

【0～10秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

S E 2 クロエの足音 1

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【『かすかに聞こえる』程度の大きさから近づいてきて、3メートルほど離れた位置でストップする】

▲ ボイス加工あり

【3メートルほど離れた位置から聞こえる】

●正面 50センチ

【※6回※ 呼吸する。】

走ってきた苦しそうな呼吸から、だんだんゆっくりになる。

『療養中のはずの主人公が出歩いている』という噂を聞きつけて、急いで帰ってきたの

で

はあ、はあ。はあ、はあ。
はー。はー。

【※1回※ 呼吸する。

とてもゆっくりと。

普通の呼吸とため息が入り混じっているような感じで
はああ……。

【少しばかんとして。

主人公が部屋にいて、寝ている事が確認できたので。

主人公は寝て いるか、まだ外にいるかのどちらかだろうと思つていたので
……あ、起きてた……】

SE3 クロエの足音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【次の『クロエ』のセリフと重ねて流す】

SE4 主人が起き上がる音

【最初から最後まで流す】

【次の『クロエ』のセリフと重ねて流す】

S E 5 クロエが目の前の椅子に腰かける音

【最初から最後まで流す】

【少し小さめの音量で流す】

【次の『クロエ』のセリフと重ねて流す】

△主人公

「……お、おかえりなさい。今日もお疲れ様。

今日は早かったのね！」

▲ボイス加工あり

【3メートルほど離れた位置から50センチほどまで近づいてくる】

●正面 50センチ

「少し拍子抜けしながら。

帰宅の挨拶をする。

また、いつもより帰りが早い事について述べる。

それは無論主人公のうわさを聞きつけてきたからなのだが、それについてはまだ話さない

ただいま……。

そー……今日は早く上がれた！……。

〔優しく少し語尾が伸びた感じで。〕

でも心配そうに】

……身体、大丈夫ー？　今日は一日、ちゃんと寝てたー？】

〈主人公〉

「……ええ！　ありがとう。もちろん、この通りよ】

主人公、わざとらしいながらに、必死に何事もなかつたかのようにふるまう。
外に出ていたなんて、とても言えないからだ。

●正面 50センチ

〔ホッとしたように。〕

『もしかすると噂は誤報で、主人公はずつとおとなしく寝ていたのではないか』と、少し思
い始めているので】

そつかあ……】

〈主人公〉

「言われた通り、ちゃんと寝ていたわ」

●正面 50センチ

「少し疑問を感じている風に。

主人公の態度が、妙に不自然で、怪しいので】

んー?』

〈主人公〉

「ええ……この通り』

しかし、相手はクロエである。

一度は誤魔化せたかのように思えたが、再び主人公を疑い始めている。

●正面 50センチ

「少しづつとらしく、相槌を打つ。

また『噂は本当だったようだ』と確信する。

主人公の態度が、あまりにも不自然で怪しいので】

……ほお。ほお？……?

ほんとかなあ。

【自分が聞いた噂について切り出す。

本来寝てているはずの主人公が出歩き、それどころか仕事までしていたらしい件について述べる。

『リーナ』とは主人公の同僚】

実はね。

『夕方頃、あなたらしき人が工房の近くを歩いてた』とか。

『リーナの代わりに接客してた』とか……。

『そのついでに、ケガしてた人の治療までやつてた』とか。

あたし、色々聞いてやつて。

だから、急いで帰ってきたんだけどなあ……?』

〈主人公〉

「……あら。

それはきっと、例のわたしのそっくりさんね』

主人公、苦しい言い訳を始める。

もはや無駄な抵抗の気がしてきたが、かといってやすやすと諦める訳にはいかないのだ。

●正面 50センチ

「少しづつらしく、相槌を打つ。

主人公がバレバレの嘘をついている事はわかっている。
だが、とりあえず最後まで聞いてあげる事にする。
必死にごまかしている主人公がかわいらしいので一
ふうん？」

〈主人公〉

「……そう。最近よく見かける、わたしにとてもよく似た方。
きつとあなたが聞いた噂は、すべて彼女がなされた事に違いないわ。
そもそも、わたしみたいな顔をした方なんて、いくらでもおられるし……。
似たような顔の方が似たような事をされていても、なんら珍しい事ではないよう思う
の。そうじやない？」

●正面 50センチ

「少しづつらしく、相槌を打つ。

すべてが口から出まかせである事を把握した上で、引き続き話を聞いてあげる】

ほお。

そおかあ。そうなんだあ……。

『そつくりさんの仕業』かあ……。

て事はそつくりさん、今日は、服まであなたと似た感じにしてたんだねえ

△主人公

「えつ?

あつ。……へええ、そうだつたの……!

わたしたち、とつても気が合うみたいね」

●正面 50センチ

「にやにやとわざとらしく、相槌を打つ。

主人公の必死の嘘が面白くなつてきて いるので
ねええく……? あなた達つて、本当に気が合うんだね。
何から何まで一緒で。

他の人には見分けがつかない程同じとか、なんか妬（や）けちゃーう」

△主人公

「そうそうそう。そうそうそう。

きつと直接対面したら、わたしたちきつと友達になれるに違いないわ」

うーん、苦しい。すでに茶番である。

主人公、にやにやとこちらを見つめるクロエに向かって、何度もこくこくと頷く。すでにもうバレバレな事くらい、主人公にもわかっている。

だが、後に引けなくなってしまったのだ。

●正面 50センチ

「にやにやとわざとらしく、相槌を打つ。

主人公の必死の嘘が面白くなってしまっているので】

そうだね。

もしもいつかあなたと彼女が対面したら、親友になれる事間違いなし。

リーナも、彼女が見た目だけじゃなく、中身もあなたに似たとつてもいい人だから、とても助かつたみたい。

【少しトーンを普段の状態に戻して。

リーナというのは主人公の同僚。

身重で仕事を続いているので、一部の作業ができない。

その為主人公が助ける事が多い。

主人公が無理を推して出勤したり抜け出したりしているのは、彼女を手伝うためという側面が大きい。

そのため、リーナはとても主人公に感謝しているので。

その件については、真面目に伝えたいので。

また、これはクロエが怒るに怒れない要因にもなっているので

でも、心配してたよ？』

△主人公

「え？」

△正面 50センチ

「[少しトーンを普段の状態に戻して。

リーナからの伝言を述べる]

だつて、リーナは彼女を、完全にあなたと勘違いしてるからね。

『手伝つてもらえて、とても嬉しかった。でも、この前の薬の件があるのだから、どうか無理はしないでね』って言つてた』

（主人公）

「あら……。それはありがたい心遣いだわ。

人違いをされているのは、なんだかそつくりさんに申し訳ないけれど……」

●正面 50センチ

「トーンを普段の状態に戻して。

優しく、心配した声で。

動搖する主人公がかわいくてしばらくからかってしまったが、主人公の体調についてはとても心配なので

……で、どうなの？ 調子は。

痛いとか、苦しいとか、しんどいとか、ない……？

（主人公）

「えっ？ エーっと……そうねえ……。

……まあ、大丈夫だと思うわ。

このまま寝てれば、いずれ全部抜けると思う」

●正面 50センチ

「〔※息遣いのみ※〕で表現する。

『ふーん？　本当にそうかな？』という感じで

【ひとまず相槌を打つ。】

主人公の主張については疑問があるが、ひとまず全部話を聞いてから、今日伝えようと思っている件を切り出したいので

……そつかあ。

〔※息遣いのみ※〕で表現する。

小さく息をつく】

……。

【もう一度同じ言葉を繰り返す】

そつかあ。

なら、いいんだけど……】

……。

△主人公△

「ええ。先生も、かぶった薬の組み合わせからして、人体に大きな支障はないはずだとおつしやっていたし。

このまま何事もない事を祈るしかないわね」

●正面 50センチ

「少しわざとらしく。
真相を知った上で、主人公に合わせていてるので
なるほどねえ」

〈主人公〉

「そう。祈りましょう？ このまますべてが無事に済む事を……」

●正面 50センチ

「少しわざとらしく。
真相を知った上で、主人公に合わせていてるので
ふむ。

〔普段のトーンに戻つて。

実際がどうあれ、主人公にはまた休息が必要なので〕

まあ、あと何日かは寝てようね？

〔※息遣いのみ※ で表現する。
一息つく、という感じで。

※重苦しいトーンにならないようにお願いします※

……はー……。

【数日前の出来事について述べる。

それは、主人公が、落下する薬品の入った箱から少女を守った時の事である。

主人公は無事に少女を守れはしたものの、様々な種類の薬品を頭からかぶつてしまつた。また、ガラスが割れた事で軽いけがを負つたので、労災という事で、しばらく療養する事になつたのである。

もつとも、主人公はしょっちゅう抜け出しては仕事をしたり、人助けをしたりしているのだが……】

まさか工房にあつた薬、あの量被つちやうとは思わなかつたよねえ……。

【医者の発言について述べる。

クロエにとつて、現状があまり安心できるものではないので。

医者は主人公の状況について、あいまいな表現で隠しているように思ええるので】でも、お医者さんはそういう風に言うけど。

妙に気になる言い方するよね～。

『被つた薬の組み合わせからして、毒性のある反応は起きないだろう』

『人体に深刻な影響はないはず』
つて事はさあ。

毒性以外の反応とか、人体に多少影響ある事は起きるかもしれないって事にならない?』

『主人公』

「……まあ、そうねえ?』

S E 6 クロエが布団に入つてくる音

【最初から最後まで流す】

【一気に近づいてくる】

クロエ、布団に入つた事で、距離が近づく。

●正面 15センチ

『優しく、でもはつきりと主人公に言い聞かせる。

主人公はどうにも、自らの病状を軽視しているよう思えるので
とにかく今のあなたは

『事故により、工房の魔法薬を大量に浴びた労災状態』

『いつ何が起きてもおかしくない、不安定な身体』
つてやつなんだから。

【優しく念を押す。】

また、周囲がいかに主人公を心配しているかについて述べる】
少しでも『何か変だな』『困ったな』って事があつたら言つてね?
みんなあなたの事、すごく心配してゐよ。

あなたが助けたあの女の子の為にも、しつかり療養して。
異変が起きたら治療するし、異変がなくとも休んで。
早く元気になつたところを見せてあげようね】

△主人公△

「……ええ。

あなたのおつしやる通りね。

ありがとう。そうさせていただくわ】

●正面 15センチ

「[にっこりと。

主人公の理解が得られたようなので】
そう。わかってくれて嬉しい。

【少し間をあけてから。

今日、最も話したい事を切り出す。

少し訝しがっている感じで。

しかし、深刻な雰囲気ではなく、少しこミカルに】
でもさあ……』

『主人公』

「うん？」

クロエ、『左0センチ』の距離まで移動して『無聲音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無聲音』ささやき ※マークのセリフまでささやく
「【さらつと、ひそひそと。

まるで当然の事のように、はつきりと確信を持つて言う】
でも。ほんとの事を言うと。

……実はもう起きてるんでしょ？ 異変』※

『主人公』

「んん？」

クロエ、『左〇センチ』の距離まで移動して『無聲音ささやき』をする。

●左〇センチ『無聲音』ささやき ※マークのセリフまでささやく
「〔さらっと、ひそひそと。」

まるで当然の事のように、はつきりと確信を持つて言う
あたしには。……っていうか、誰にも言えてないんだろうけど。
すでに起きてる異常。あるよね？」※

〈主人公〉

「えーっと……」

まずい。話が良からぬ方向に転がってきた。

主人公、思わず目を泳がせるが、そんな主人公に、クロエはキスをする。

●左〇センチ

「〔※1回※ 左耳にキスする。
軽く触れるだけのキス】

ちゅ」

クロエ、会話をする為に少し離れる。

●正面 15センチ

「優しく、でも有無を言わせない口調で。

今日という今日は主人公に真相を話してもらうつもりで、クロエは帰宅したので】
ごめんね。わかつてる。もう隠さなくていいから】

〈主人公〉

「……」

●正面 15センチ

「優しく気遣うように。

また、主人公の容態について自分の推論を述べる。

最大気遣った表現で、だが確信をもつて話す】

わかってるよ。

本当は……薬を被った日からなんだか全身熱くて。

変な感じなんでしょう？

他は何もないから……一応普通に暮らせてるけど。
だけど実は、かなり困ってる。

そうでしょう？』

『主人公』

「身に覚えがないわね……」

●正面 15センチ

『優しく気遣うように。

また、主人公の容態について自分の推論を述べる。

最大気遣った表現で、だが確信をもつて話す】

『身に覚え』……？ あるよね。

少なくとも、あたしにはあるよ。

【優しく、でもちょっと呆れたような感じで。

『まったく、ここまで言つて尚しらばつくれるつもりか』と思つてないので】

匂いでわかるもん。

【ぼそっと。

この事態に気づいたのは、今日ではないので]
ていうか……前から知つてたし

〈主人公〉

「……えつ？」

●正面 15センチ

「※小さく息をついてから※ 話す。

優しく、でも少し申し訳なさそうに。

実は少々呆れている気持ちもあるが、それ以上に主人公の事が心配なので。

また、主人公がようやく認める気になつた、あるいは、ボロを出したのでホツとしても
いる】

ごめんね。

本当はこういうの、あんまり人にバレたくないだろうし。

あたしからは何も言わず。

『相談してくれるのを待つた方がいい』って思つてた。

だから、この三日位……あなたの様子を見守つてたけど……。
やつぱ、言いづらいまま一人で悩んで苦しんでるの、知らないふりとか、できない

△主人公

「……」

●正面 15センチ

「【※小さく息をついてから※ 話す。

少し申し訳なさそうに、だが、強い意志を持つて。いつからこの事態に気づいていたのかを述べる。

また、頑固な主人公がこれ以上をしらを切り通せないよう、自分の推論を話す事にする。

『現場』とは『主人公が薬をかぶった事故現場』の事

……ごめん。もう、はつきり言うね。

ほんとは現場の掃除した時から気づいてた。

あなた。被った薬の種類のうち……一個、お医者さんに一個報告しなかったのがあるでしょ。

あの、ピンク色の薬。

本当はあれも一緒に浴びて……他の薬と組み合わさった事に寄つて出てきた催淫性に、困つてゐる。よね？」

△主人公

「……」

あっ、もうダメだ。

主人公、ギリギリ黙秘しつつも、ほぼ観念する。

ここまでか、というやつである。

●正面 0センチ

「優しく諭すように。

クロエとしても、これ以上この件を長引かせたくない。

そろそろ主人公に認めさせて、次の段階に移りたいので】

……困つてゐる、でしょ？』

△主人公

「はい……」

●正面 15センチ

「【ほつと息をつく。

ようやく主人公が認めたので】

……ふう。

【明るく、優しい声になつて。

ひとまず第一の関門を突破したので】

やつぱり。

やうつぱそうだつたんだね？」

△主人公

「ごめんなさい……言い出せなくて……」

主人公、もごもごと自分の指同士をつんつんさせながら、叱られた子どものようになつて謝る。

いずれバレるとはわかっていたが、いざそうなると『もつと早く正直に言えばよかつた』という後悔が押し寄せてきたのである。

●正面 15センチ

「【穏やかに優しく。

なかなか認めず、また言い出せずにいた主人公の気持ちも、クロエは理解できるのでううん。いいんだよ。言い出しにくい気持ちはわかるし。

【優しく。

主人公への共感を示し、また、早い段階で打ち明けた場合、どのような事が起きていたのかという推測を述べる。

それから、主人公の気持ちを代弁する

こういうの、たとえお医者さんが女でもあんま知られたくないよね。
素直に言つたら、容体について色々聞かれるのは避けられないし。

あの子や、あの子の家族にも耳に入りかねないけど。

小さい子にはますます説明しにくいやつだし……。

だから、収まるまで一人で我慢しようと思つてたんでしよう?』

〈主人公〉

「……うん」

●正面 15センチ

【穏やかに優しく、でもちよつと呆れたような声で】
やつぱりね。

【少し間をあけてから。】

今度は、とても優しく。

クロエにとつて一番大切な事は、主人公が主人公らしい選択ができる暮らしを守る事なので。

そのせいで苦労をしたり、困ったりする事もある。

だが、それでもクロエは『主人公が、主人公らしい生き方ができる環境』を守りたいので

あなたらしいね。

【穏やかに優しく。

納得した様子で】

あなたらしくて、納得したし。

【かわいく、ちょっと呆れた感じで】

あなたらしいから、できれば見守りたいと思つてたし。

【かわいく怒った感じで】

あなたらしいせいで……ちょっとむかついてる

〔主人公〕

「……えーっと……」

しかし、クロエは優しかった。

と思つたら、やはり怒つていた。

主人公はどうしたらいいかわからなくなつて、おろおろとクロエを見上げるばかりだ。

●正面 15センチ

「かわいく怒つて。

もちろん、本気で怒つてはいない感じで。

主人公の性格上、なかなか相談したがらないだろう事は理解していた。

それでも恋人として、本当は主人公の方から打ち明けて欲しかつたので

だつてあたし。あなたの彼女なんだよ？

『もうちよつと早く相談してくれたつていいのに』つて、ちよつとは怒つてるよ。

『薬のせいで変な気分になりすぎて、色々参つてる』つて、あなたから教えてほしかつ

た

〈主人公〉

「……ごめんなさい。

あなたに迷惑をかけたくないくて……」

●正面 0センチ

「ちよつとかわいく怒りつつも、優しく。

主人公への共感を示して。

仮に逆の立場だった場合、クロエが素直に主人公にすぐ相談できたかというと、正直なところ自身がないので【】

でも、言えないだらうっていうのも、やっぱりわかるから。
だからね……今日は健康調査だけで許してあげる』

（主人公）

「!?」

しかし、そんな主人公にクロエが取った行動は意外そのものだつた。

主人公が『健康調査って?』と尋ねる間もなく、クロエが近づいてくる。

クロエ、左耳側に移動して話す。

●左 0センチ

「【優しく、でも有無を言わせない感じで。

自然とセクシーな雰囲気に移行する感じで。

ここで言っているのは建前】

変な薬浴びて、今、あなたの身体がどうなってるか。

魔法薬師（まほうやくし）の資格を持つものとしては確認しておきたいし。

【ぼそっと。

こちらが本音】

恋人として……純粹に気になつてるし】

〈主人公〉

「！」

●左 0 センチ

「【優しく、でも有無を言わせない感じで。

さらに一段階、自然とセクシーな雰囲気に移行する感じで】

だから……秘密を作った悪いあなたに】

クロエ、『左0センチ』の距離まで移動して『無聲音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく、少し悪戯っぽく。

少しセクシーに、今後の展開を期待させるような雰囲気で。

※特に聞き手をドキッとするイメージでお願いします※】
ちよーっとおしおき……しゃやおつかな？」※

ここでフェードアウトして終了。